

朝鮮半島と日本の「茶」文化の違いについて

武井 一

●はじめに

日本と朝鮮半島の交流の歴史は古い。朝鮮半島を通じて様々なものを受容している。その中には中国のものもある。もちろん中国から直接日本に入ってくるものもあるのだが、その多くが朝鮮半島経由であったとされる。したがって、中国のものも、一度朝鮮半島で咀嚼されたものが日本に入ってきているといえる¹。一方でトウガラシは、現在の韓国の食生活になければならない食材であるが、これは日本から朝鮮半島にわたったものである²。このように、両者は互いに影響を受けながら現在に到っている。

だが、そのように互いに影響を与え合いながらも、両国の文化は同じではない。よく似ているのだが、違う面も多いのである。茶を飲む文化もそうである。日本では緑茶が常用されるとともに、「もてなし」と「しつらい」の美学ともいえる³茶道が生み出された。「韓国」では、韓国の茶道はあるものの⁴、日常生活で緑茶を飲むことはあまりない⁵。韓国で「茶」とか「伝統茶」と言った場合、「ゆず茶」や「五味子茶」のような果実や漢方薬を煎じ、砂糖を入れたものを指すことが多い⁶。

朝鮮半島で飲茶の習慣がなくなったのは、一度は盛んだった飲茶文化が、様々な条件から衰退してしまったからである。一方で、日本の茶は12世紀の栄西に始まり、16世紀の千利休により完成された「茶の湯」の流れと、18世紀の半ばに今の姿になった煎茶の流れがある。飲茶に関する両国の歴史の違いが、両国の茶文化の違いになったと考える。

茶の文化や、茶道については、朝鮮半島の文化の影響を指摘するものも見かける⁷。その真偽はさておき、朝鮮半島の「茶」の歴史を見ることは、日本の「茶」、「茶道」との関係を検討するのに役立つと思われる。そこで、朝鮮半島と日本の茶の歴史を見て、両国の茶に関する文化が異なる理由を明らかにすることにしたい。

●朝鮮半島の茶の歴史。

朝鮮半島の茶の起源については、伽耶時代(?-562)にインドから入ったとか⁸、百濟時代(BC18(伝)-660)にすでにあったとする説がある⁹。

だが、文献上、朝鮮半島に「茶」に関する記録が現れるのは「新羅」(BC57(伝)-935)のことである。それは、朝鮮の歴史書『三国史記』の新羅本紀、興徳王3年(828)12月のことであ

¹ たとえば、木簡学会編『木簡から古代が見える』岩波文庫(2010)143頁以下

² たとえば、鄭大聲『朝鮮半島の食と酒』中公新書(1998)36頁以下参照。

³ 裏千家ホームページ <http://www.urasenke.or.jp/textb/spirit/spirit1.html> より

⁴ 韓国にも「韓国茶道協会」があるが、韓国茶道の成り立ちは扱わないこととする。日本の茶文化、茶道の位置づけを見るのに必要な範囲で、韓国の茶文化を扱うからである。

⁵ 鄭大聲、前掲書129頁以下

⁶ 鄭大聲、前掲書129頁以下参照

⁷ たとえば、『民団新聞』2006年4月5日 http://www.mindan.org/shinbun/news_bk_view.php?page=1&subpage=1178&comer=6。
鄭大聲、前掲書125頁は、「高麗時代の飲茶の風が当時の日本に大きな影響を与えたことは明白」とする

⁸ 伽耶(加羅)は多くの国々の連合体で、統一国家にはならなかった。

⁹ 以下は『韓国民族文化大百科』(インターネット版)を参照した。

る。それによると、唐（618-907）から帰国した「大廉が茶の種子を持ってきた。王はこれを『地理山』に植えさせた。茶は善徳女王（位 632-647）の頃からあったのだが、ここにおいて盛んとなった」。ここでいう「地理山」は韓国南西部にある「智異山」のことで、寒冷地に属する朝鮮半島では、土地と気候の条件が茶の栽培に適している数少ない場所である¹⁰。そのため、現在でも茶栽培の中心地の 1 つとなっている¹¹。新羅では、主に僧侶や「花郎」¹²らが茶を楽しんだようだ。

新羅の次の「高麗」（918-1392）は、国王や貴族が仏教を庇護した。それにともない、仏教の勢力が大きく成長し、新羅時代に僧侶が楽しんだ茶の文化も広く流行した。茶は、高麗王朝にとって外交の主要な贈り物として使われたり、国王が臣下に下賜するときに使われたりした。また、二大国儀（国の儀式）とされた「燃灯会」¹³、「八関会」¹⁴などでは、近侍官が王に茶を捧げる「進茶儀式」が行われた。貴族も茶を飲んだが、宋（960-1279）から中国茶を買っていたという。貴族層に属した僧侶も茶を飲み、なかでも、禅僧は茶を修行と関係させた。寺院に茶を進供する「茶村」を所有するほどであった。ただし、茶を栽培できるところが少ないため、生産量も多くなく、品質も良くなかったようである¹⁵。貴族が宋から中国茶を買っていたのもそのためである。

「高麗」に次ぐ国である「朝鮮」¹⁶（1392-1910）では、「拝仏崇儒」が政策の柱となった。これによって仏教が衰退した¹⁷。茶の文化は仏教と結び付いていたから、仏教の衰退にともなって、茶の文化も衰退した¹⁸。しかし、飲茶の習慣が無くなったわけではなかった。特に「朝鮮」初期は王室でも、外国使節に茶を振る舞う「茶礼（タレ）」が行われていた¹⁹。しかし、その後、豊臣秀吉が「朝鮮」に侵攻した 1592 年頃には、王室でも茶を飲む習慣がなくなってしまった。これについて、第 14 代国王宣祖（位 1567-1608）は、明からの使者に対して、「本来、我が国に茶を飲む習慣はない」と答えている。ただ、そうであっても、寺院では飲茶の習慣は続いており²⁰、茶の栽培自体も、少ないながらも続いていた。

飲茶の習慣が復活したのは 19 世紀に入ってからのことであった。「茶道（タド）」という用語が使われるようになったのもこの頃のことである。特に艸衣（チョウイ：1786-1866）の著した

¹⁰ 茶の栽培条件は、年平均気温：12.5℃前後。最低温度：-15℃以上。年平均降雨量：1400 mm以上。特に 4 月から 10 月の間に 1000 mm以上必要。さらに。排水の良い台地や丘陵地を好む。

¹¹ 智異山に近い宝城地域は茶の主産地として知られるが、そこは年平均気温：13.4℃、最低平均気温：-10℃、年平均降雨量：1459 mmで、南海岸に近いために、日較差が大きく、年間霧日数も 89 日以上が多湿地域であって、茶の生育に適している（韓国茶博物館 HP http://koreateamuseum.kr/home/page_04_005.php より）。他の山地も慶尚南道、済州島など、いずれも暖地である（権赫在『韓国地理』総論〔第 3 版〕 法文社〔ソウル〕〔2003〕234 頁以下）

¹² 貴人の子弟をリーダーとした青年集団（武田幸男編『朝鮮史』山川出版社〔2000〕78 頁）

¹³ 正月 15 日、仏のために全国の仏寺で灯火をかかげ、国家の太平を祈念した（武田、前掲書 134 頁）

¹⁴ 11 月の初めに行われる国王の朝賀儀式、宋、女真、耽羅、日本の商人も参加（武田、前掲書 134 頁以下）

¹⁵ 「土産茶。味苦澁。不可入口。惟貴中國臘茶。并龍鳳賜團」（『宣和奉使高麗圖經』卷第 32）

¹⁶ 韓国ではこの時代を「朝鮮王国」という。いわゆる「李氏朝鮮」のこと。

¹⁷ 弾圧はされたが、禁止されたのではない。個人的には信仰していた王もいた。統治原理として採用されなくなったのであって、国家と個人の安寧を祈る宗教として、広く民間で信仰されていた（武田、前掲書 189 頁参照）

¹⁸ 19 世紀末に朝鮮に行ったイザベラ・バードは、『朝鮮紀行』の中で「都会ですらお茶をめったに飲まない」と書いている。イザベラ・バード・時岡敬子訳『朝鮮紀行』講談社学術文庫（1998）126 頁

¹⁹ 現在も『茶礼』はあるが、現在は、儒教式の祖先祭祀のことをいい、茶を飲む礼とは異なる。

²⁰ 朝鮮では 4 代国王世宗の時に諸宗派を禅、教二派に整理したが、朝鮮中期以降国家との関係が切れ、私的なものとなっていた。僧侶も禅宗と教派の両方を学ぶようになっていった。朝鮮時代の仏教の流れは、鎌田茂雄『朝鮮仏教史』東京大学出版会（1987）201 頁以下参照

「東茶頌」は、朝鮮の「茶道」を理論的に整理、発展させたと言われる。その後、日本の勢力が強くなるにつれて、茶の生産量も徐々に増えていったが、日常生活の中で常飲される状況にはなっていない²¹。

●日本の茶

日本の茶の文化は、8世紀に唐から入り、9世紀初頭には栽培が始まったという²²。だが、日常的に飲まれるまでは行かず、途絶えてしまった。その後改めて、現在の茶の文化に繋がるきっかけが生じた。そのきっかけとは宋に渡っていた栄西(1141-1215)が帰国したことだった(1191)。栄西は禅宗をもたらすと共に、宋で広まっていた抹茶の手法と、茶の種ももたらした。その種(苗であったともいう)は筑前背振山などに蒔き、次第に各地で茶が栽培されるようになった。日本では茶の栽培に必要な気候条件が合う場所が多いのである。飲み方も変わり、寺を中心に薬用として飲まれた抹茶が、嗜好品として愛用されるようになった。鎌倉後期から室町時代にかけて茶の味を飲みあてる「闘茶」が流行した。

ところで、禅僧が従うべき規範の中に喫茶儀礼があったが、これが元となって鎌倉時代後期から南北朝期にかけて、民間での茶礼、茶会形式が生まれた。この時代は、中国との私貿易や禅僧の往来が盛んであったが、そのような動きを通じて、中国から舶載品である唐物が多く日本にもたらされ、唐物を部屋に飾ったり、それらを用いた茶会が行われたりするようになり、室町時代には武家儀礼として定着した。

だが、15世紀後半に入ると、唐物中心の否定する流れが出てきた。「わび茶」の創始者であると言われる村田珠光(1422?-1502)がそのきっかけとされる、村田は茶道に禅の思想を実現しようとしたが、その中で唐物と和物の融合を説き、備前焼、信楽焼などのもつ素朴な美しさに関心を持った。この考えは、16世紀に入り武野紹鷗(1502-55)を経て、弟子の千利休(1522-91)に受け継がれた。千利休は大徳寺の禅僧に深く帰依したため、それまで以上に茶道に禅宗を近づけることになった。また、積極的に高麗物と呼ばれる朝鮮の生活雑器を取り入れた。千利休によって茶道はほぼ完成の域まで高められ、その後の茶道が発展することとなった。

抹茶に対して、煎茶は、明(1368-1644)で行われた始めた製法である。その普及には、江戸初期、黄檗宗の隠元(1592-1673)とその弟子が大きな役割を果たした。初期の煎茶は、今日の番茶に近いものであった。現在の煎茶に近いものが作られるようになったのは、茶葉を揉み乾かす「蒸し製煎茶」法が京都宇治で発明されてからのことであるが(1738)²³、この煎茶が日本人の好みに合ったため、日常的な嗜好飲料として一般庶民にも広まっていったとされる。

●まとめー日本と朝鮮半島の茶の文化の違い

ここまで朝鮮半島と日本の茶の文化の歴史を見てきた。朝鮮半島では新羅時代に茶を飲む習慣

²¹ 「伝統茶」からの発想もあるのだろう。筆者はソウルの高級ホテルで、緑茶に砂糖がそえられているものを飲んだことがある。

²² 以下は、『日本大百科全書』15 小学館(1987)、『世界大百科事典』18 平凡社(2006 改訂版)を使った。

²³ 永谷宗円茶店ホームページ(<http://www.nagatanisouen.com/about/03.html>) 参照

が入ってきて、高麗時代に最盛期を迎え、朝鮮王朝中期には殆ど飲まれなくなったことが判った。茶の文化と仏教との結びつきが強かったことと、気候条件的に茶の栽培に適さなかった所が多かったからである。

一方、日本の茶の文化は一度廃れたものの、鎌倉時代、栄西によってもたらされてから、広く普及することとなった。朝鮮半島と同じく最初は仏教と結びつき、薬用として飲まれていたが、次第に民衆の嗜好品に変化した。その背景には、多くの地域で、気候条件などが茶の栽培に適していたということもあろう。この中で抹茶を使った茶道が発生し、煎茶も広く飲まれるようになった。

このように、日本と朝鮮半島では、茶をとりまく条件が大きく異なっていた。日本は日本の条件の中で茶道が成立した。茶道が成立した時期は、朝鮮半島では茶の文化が廃れた時期だから、日本の茶道の成立あたっては、朝鮮半島からの直接の影響はほとんどないだろうと思われる。千利休が死亡した年も豊臣秀吉による文禄慶長の役（1592-1598）の一年前であるから、この戦争で連れてこられた陶工、思想家と接触する機会も無かった。

ただ、直接の影響が無かったからと言って、まったく影響が無かったとも言えないように思われる。袱紗などの茶道具や茶器が高麗のものと似ているという指摘があるが²⁴、文禄慶長の役までは両国間で盛んな往来があったから、その可能性もあろう。もしかすると、私的な形で朝鮮の陶工が日本にいた可能性も考えられるだろう²⁵。一方で、偶然似ていたり、同じ時期に中国から双方に入ったりしている可能性も否定しきれない。また、茶道が禅宗を背景として発達したことからすると、禅宗思想の段階での影響は十分に考えられる。

さらに、文禄慶長の役で陶工が日本に連れてこられ、日本の焼き物文化が発展した。陶工だけでなく姜沆（カンハン：1567-1618）のような儒学者や、朝鮮から連れてこられて加藤清正の重臣となった金宦のような人物もいる。姜沆が藤原惺窩に思想的に影響を与えているように、彼らの思想やが、その後の茶道に影響を与えている可能性も考えられる。このように様々なことが考えられるが、実際にそうなのかについては、将来の研究に待ちたいと思う。

最後に、現在の韓国でも茶道が行われている。両国の茶道が影響を与え合いながら、互いに発展していくことが望ましいと思われる。

²⁴ 鄭大聲、前掲書 125 頁

²⁵ 可能性の問題であって、証明されたわけではない。